

Care & Communication

ケア&コミュニケーション

P1-2

THE FRONT LINE



ヘルスプロモーション中心の
歯科医療から乳幼児歯科と
食育活動を切り拓く

岩井歯科 理事長
岩井 正彦 先生

P3-4

INSIDE REPORT



「口福楽笑」をコンセプトに
健康志向の患者を守り育てる

添島歯科クリニック 理事長
添島 正和 先生

P5-7

DOCTOR'S TALK



レーザー療法での症例と実践応用講座 | 2

Nd:YAGレーザーを応用した2症例
レーザーは嚢胞に著効

医療法人社団 は・匠会 理事長
行田 克則 先生

SASAKI

<http://www.sasaki-kk.co.jp>

ヘルスプロモーション中心の歯科医療から 乳幼児歯科と食育活動を切り拓く

岩井歯科 理事長 岩井 正彦 先生

岩井歯科には、「健康創造サロン」と「Teeth Land」の別称がある。
幼い頃から患者さんの健康を守り育て、生涯に渡ってサポートするとの考えからだ。
予防歯科と食育活動に力を入れる理由を岩井正彦理事長にうかがってみた。



岩井 正彦 理事長

50歳を過ぎてからの 予防歯科との衝撃的な出会い

開業から15年ほどの間、岩井歯科の診療は補綴中心だった。岩井理事長は大学での研究を続け、歯周外科やインプラント治療、小児育成歯科学を率先して学ぶなど、熱心に勉強を続けた。「子どもも楽しく通院し、虫歯が1本もない成人を育てられる歯科医院が目標でした。でも、現実には削ったり詰めなどの治療が中心。予防がうまくいかないジレンマに悩んでいました」

2004年、岩井理事長は衝撃的な出会いをする。予防歯科に取り組む日吉歯科診療所の熊谷崇理事長に出会ったのだ。セミナーに参加し、虫歯や歯周病を発生させないように口腔内の健康を総合的に管理する「オーラルフィジシャン」の資格も取得するが、熊谷理事長にショックな言葉もかけられた。

「20年以上、治療が中心の先生が予防に取り組むのは、できるはずがないからやめなさい、と言われました。予防歯科には診療データの積み重ねによるエビデンスが欠かせません。今から始めるには無理があると熊谷先生は言うのです」

しかし、岩井理事長はあきらめることなく、予防歯科の勉強をコツコツと続けた。

「熊谷先生との出会いから7年経ちましたが、未だにできていないことがたくさんあります。しかし、患者さんから「予防に通って本当によかった」という声を耳にすることも多くなり、やりがいと

充実感を感じます。また、これから歯科医療のあるべき姿を若いドクターたちに伝えていくことにも使命感を感じています」

予防歯科から発展した 食育に力を入れる

岩井歯科が今、もっとも力を入れているのは、一生を通じた健康支援だ。岩井理事長は師である熊谷理事長の「命の寿命と歯の寿命の逆転を図る」という言葉を胸に、「命のある限り、自分の歯で噛めることが大切。患者さんの益にならないことはどんな歯科医療も意味はない。歯科医療は患者利益なのです」と強調する。

歯科には乳幼児から高齢者まで全世代が訪れること、食べることは健康の基礎であることから、予防歯科に力を入れると、自然と食育と健康の関係にも目が向くとも言う。

「食育は子どもが対象と思われませんが、食は一生のものです。50歳以上の多くが何らかの薬を飲む背景には食と健康の関係に対する知識不足が影響しています。そこで、私の歯科医院では食育の答認定校を取得し、「健康・食育マスター/ヘルスエデュケーター」を育て、患者さん対象のセミナー開催にも力を入れています」

「健康・食育マスター」とは、病気になるための食の知識と実践ができる専門家を認定する民間資格だ。文部科学省

住宅街の中にある岩井歯科



サロンとしても使える待合室



広々とした受付



カウンセリングルーム



予防専門のケア用個室



治療を行うキューア用個室



オゾンで清潔な環境に維持されたインプラントサロン

スウェーデン方式の消毒システムを導入した滅菌室



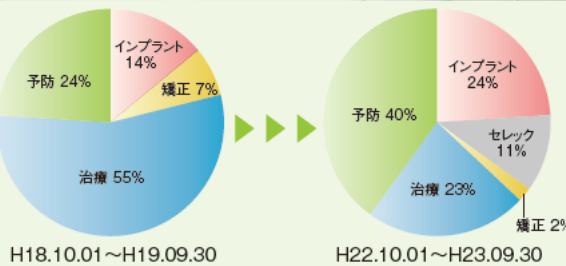
カーボンオフセットを目的とした植樹イベント風景



補綴物1つ装着する際に出る医療廃棄物を視覚的に展示
小児歯科部門「ティースランド」への入り口

診療割合の変化

環境にも優しい予防中心の診療に転換して以降、診療内容も大きく変化している。



岩井理事長とスタッフのみなさん

が認可する公益財団日本生涯学習協議会の監修・認定講座の受講により資格が取得できる。岩井理事長も「健康・食育シニアマスター」を取得し、スタッフの多くも「食育マスター」を取得。岩井歯科は、食育の答「健康・食育マスター」の教育拠点にもなっている。

世界標準の環境保護を目指し、ISOを取得

予防歯科を徹底したことで、もう一つ、大きな変化があった。滅菌・衛生管理と環境保護を重視するようになったことだ。以前から力を入れていたが、さらに世界標準のシステムを徹底した。その結果がISO9001:2008、ISO14001:2004統合の取得だ。

環境負荷が少ない医療機器の導入、最新の循環型汚水処理システムの整備に加え、消毒・滅菌に使われる薬品で環境を汚染しないように、世界的に標準予防策として知られているラピッドステリライザーや卓上ウォッシャー・ディスインフェクターを設置した。診療室全体に電解中性殺菌水を生成するシステムも採用。さらに医療廃棄物の半分は、補綴物の製作過程で出る石膏や印象材であることから、セレックを早期から導入。その結果、医療廃棄物が減少していると言う。

「環境への関心が高い昨今、個人の歯科医院でもここまで取り組めるという姿勢を示したかった。ISO9001:2008、ISO14001:2004統合認証取得により、長年、私たちが続けてきた、削ったら詰める治療が間違いであり、親から受け継いだエナメル質を守ることがいかに大切かなど、予防歯科が健康を守る基本であることが実証できていると思っています」

小児歯科部門を増築し、乳幼児教育をさらに充実

岩井歯科は今年2月から、また新たな一歩を踏み出している。旧診療室を改築し、「Teeth Land」と命名。小児歯科部門を充実させたのだ。

「乳幼児教育に力を入れると、お母さんを通じて家族の健康

を守ることに生かされていきます。そこで、食育が歯育にもつながる拠点として、「Teeth Land」を作りました」

健康指導は、歯科や食育にとどまらない。母子の触れ合いを大切にするアタッチメント育児も取り入れ、妊娠中の母親を対象に赤ちゃんの骨や体を強くする食事のとり方、母乳や離乳食の与え方なども指導する。たとえば、母乳を飲ませたまま寝かせると、上顎前歯の虫歯が心配だ。母乳のメリットを生かし、歯を守るためには授乳後、赤ちゃんの前歯を拭き取るだけで、その後が違う。

また、リトミック教室を院内のキッズルームで開催し、噛み合わせなど子どもの口腔環境を教えている。正しい姿勢が保てる体づくりをすれば、不正咬合や口呼吸の問題が防げる。歯磨きリトミックを取り入れることで、歯を自己管理する大切さも自然と身につくという。

「ちょっとしたアドバイスが母子の関係を深め、将来の病気を防ぎます。そのための教育機会を増やし、産科でのセミナーやベビーマッサージも行っています。これからはヘルスプロモーションの時代です。歯科医院は、健康ステーションとしての役目を担っていく必要があります。今後も、よりいっそう次世代の子育て支援も視野に入れた医療活動に力を入れていきたいです」

Profile

岩井 正彦 先生

- 1979年 愛知学院大学歯学部卒業
- 1981年 岩井歯科開業
- 2002年 歯科医師臨床研修施設認定
- 2006年 ISO9001、14001統合認証取得
- 2009年 食育の答 健康・食育シニアマスター取得。特定非営利法人「口腔の健康を通して地球環境を守る会」認可
- 2010年 食育の答認定校のオープン
- 日本歯科理工学会 認定医
- 日本歯周病学会 会員
- 日本ヘルスケア歯科研究会 会員
- 日本口腔インプラント学会 会員

医療法人 正明会 岩井歯科

住所: 愛知県江南市村久野町上原63 TEL: 0587-57-3311
HP: <http://www.iwai-dc.com/>

「口福楽笑」をコンセプトに 健康志向の患者を守り育てる

添島歯科クリニック 理事長 添島 正和 先生



添島 正和 理事長

熊本市の住宅街にある「添島歯科クリニック」には、噛み合わせや義歯の悩みを持つ患者が県外からも訪れる。開業から37年、「噛める治療」と「全身の健康」を重視する添島歯科クリニックに、これまでの歩みをうかがってみた。

真正面から治療に取り組むことで 開業当時の苦境を乗り越える

「開業当時の苦勞がなければ、人生は違っていたと思います」

添島歯科クリニックの添島正和理事長は、穏やかにほほえむ。

1975年、27歳のとき、添島理事長は熊本市の中心地にあるビルの4階で開業した。地域は歯科医院の激戦区。患者数はなかなか増えず、1日2人という日もあった。

「もちろん不安でした。しかし、焦るより、目の前の患者さんに集中しよう、腰を据えて取り組もうと言い聞かせました。それが将来につながると信じたからです。その考えは間違っていないでした。丁寧な治療とコンサルティングを徹底したことが、今の診療方針と経営の基礎を作ることになったのです」

信頼を得た結果は、患者数の増加に現れた。現在地に移転後も成長を続け、95年には4階建てのクリニックに建て替えた。いまや県外からも多くの患者が訪れる評判の歯科医院となっている。

能動的に健康を考えられる患者を 多面的な情報提供で育てる

添島歯科クリニックは、「健康志向の患者さんを守り育てる歯科医院」をキャッチフレーズに掲げている。その言葉通り、待合室の掲示板やホームページを通しての歯科情報の提供、年3回の「歯科健口教室」の開催など、患者教育の取り組みには熱心だ。なかでも、目を引くのが、

- 口腔健康科学アドバイザーとして、正しい生活習慣の提案
- 歯と歯周を破壊するくいしばりの原因であるストレスの理解とストレスマネジメントの実践

の2つだ。口腔に限らず、患者の健康を全身的に考えたアドバイスも歯科医院の重要なテーマと位置づけている。

「口腔は心と全身に密接につながっています。口腔のみならず、患者さんの心身の健康によい結果をもたらさなければ、歯科治療の意味はないと考えています」

そのためには、歯科医師や歯科衛生士などの医療従事者が患者に働きかけるだけでなく、患者自身も能動的に健康に関心を持ってもらうことが重要になる。また、健康教育に力を入れることは、医療側と患者との信頼関係を強化し、コミュニケーションギャップを埋めることにも役立つのだという。

全身的な不調も改善させる エビデンスに基づいた歯科治療

添島理事長が患者の心身にも目を向けるようになったのは、全體的な治療を続けてきた長年の経験からだ。「ライフワークは咬合にある」と語るほど、添島理事長は咬合を重視する。

また大学時代、原宿デンタルオフィス院長であり、SJCDインタ

ーナショナル会長の山崎長郎先生の2年後輩だったことから、添島理事長は山崎先生と親しく交流し、共に勉強を重ねてきた。このことも添島理事長が一口腔単位を総合的にとらえ、こつこつと積み重ねたデータを基に治療する姿勢につながっている。「総義歯は基本。インプラントも義歯ができてこそ生きる技術です。経験に頼る名人芸のように考えられている部分がありますが、治療データを積み重ねれば、どんな義歯を作れば咬合が合うのか、科学的に分かるんです。私の歯科医院には、そのデータがきちっとある。だからこそ、エビデンスに基づく治療ができ、患者さんの悩みを解決できるんです」

そして、実際に口腔環境がよくなることで、患者の体調が劇的に変わるケースを数多く目にしてきた。たとえば、義歯の改善で噛めるようになったことで認知機能が回復したり、疲労感が軽減した患者も多い。心電図では異常がなく、原因不明の肩こりや胸の苦しさに悩んでいた60代の女性の場合は、歯周病だった左の7番を抜歯したところ、肩こりや胸の苦しきから解消されることになった。噛み合わせの悪さが無駄な噛みしめにつながり、その負荷が肩こりや胸苦しさを生み出していたのだ。「小さいコンポジットを見つめることよりも重要なのは、心の領域まで踏み込んでいくこと。そこまで深く関わることで、患者さんは変わっていくのです」

地域の医療環境や スタッフの健康向上も重視

添島歯科クリニックには顎関節症に悩む患者も多い。口腔を治療することで、全身的な症状も改善し、患者の表情が明るくなるのを見るのは、添島理事長にとって、なによりの喜びだ。その喜びは、添島歯科クリニックのコンセプト「口福楽笑」にも現れている。「何歳になっても口に福の神が宿るような笑いの絶えない豊かな人生を創造する」という意味だ。

「患者さんの正面の顔写真も必ず撮るのですが、治療の成果は表情に表れる。表情が明るく輝いてくるんですね」

添島理事長は、そうした喜びを共有し、全国レベルの治療ができる歯科医院を地域に増やしたいと長年、他の歯科医師との研修や交流にも力を入れている。95年にクリニックを建て替えたのも、30～40人は集まることができる研修室が欲しいと考えたからだ。

また、医療従事者も健康でなければ、という考えから、スタッフには歯科以外の健康をテーマにしたセミナーにも積極的に参加させたり、自身の健康に気を配るよう指導している。「私自身も健康には気を配っています。朝一番に歯を磨いたら、命の水とも言われるコップ1杯の水を飲み、ウォーキングに出かけます。冬でも半袖で過ごせるのは毎日の習慣のおかげでしょう。全員に勧めることはできませんが、自分の体で実践してよかった健康法も、患者さんにはどんどん伝えていきたいのです」

4階建ての添島歯科



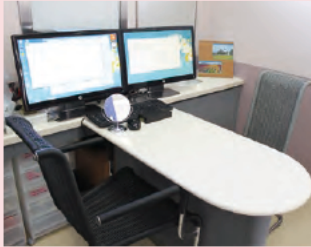
「口福楽笑」の看板が掲げられた受付



診察室出入口にAEDを設置

歯科情報の掲示板が目立つ待合室

カウンセリングコーナー



チェアそばのタブレットで病状を説明



すっきりしたチェアまわり



オペ室も完備

CTも導入

30~40人は入れる研修室



院内の歯科技工室



添島理事長とスタッフのみなさん



研究症例を掲載した
海外の学会誌

Profile

添島 正和 先生

- 1972年 東京歯科大学卒業
- 1975年 添島歯科クリニック開業
- 2009年 東京歯科大学歯学博士修得
- 2010年 福岡歯科大学咬合修復学講座 口腔インプラント学分野臨床教授に就任
- 日本顎咬合学会指導医
- 日本口腔インプラント学会専門医
- 日本歯周学会専門医
- 日本臨床歯周病学会認定医
- SJCDインターナショナル常任理事

医療法人平和会 添島歯科クリニック

住所: 熊本県熊本市京塚本町7-7 TEL: 096-381-4118
HP: <http://www.soejima-dc.jp/>

レーザー療法での症例と実践応用講座 2

Nd:YAGレーザーを応用した2症例
レーザーは嚢胞に著効

医療法人社団 は・匠会
理事長
行田 克則 先生

前回紹介した通りNd:YAGレーザーは歯内療法に効果があり、筆者は歯内療法の様々なステージで活用している。感染根管治療に着手する際の歯冠部寄りの残存する象牙質の無菌化から始まって、根管内の無菌化にも、そして抜髄症例の垂直加圧根充直前の根尖部の疼痛緩和のための根充直前照射を行なうなどいろいろなステージで使っている。また前回紹介した様に何らかの理由で再根管治療ができない場合その根尖病変への照射は非常に効果的である。本来は自院での症例で補綴物装着後に根尖病変が悪化するというのは不名誉なことではあるが、これも何らかの理由で再根管治療ができない場合と考えられる。今回は自院でコーヌスデンチャー装着後に根尖病変が再発した症例を提示したい。またNd:YAGレーザーは硬組織中の根尖嚢胞に限らず、軟組織の粘液嚢胞や規模の小さい血管腫などにも著効性がある。今回は口唇に発症した血管腫に照射した症例もあわせて報告する。

症例1

コーヌスデンチャー症例への
二つの寄与 (図1~10)

患者さんはしっかり嘔めて壊れない義歯を作りたいということが主訴の紹介の患者さんで、電車に乗って2時間の所に住んでいた。つまりいろいろと気を配る必要のある患者さんであったということである。ただ性格が温厚であったことは幸いであった。

既に上顎に義歯が装着されており義歯には慣れていた。またすれ違い咬合に近い状態で天然歯は、32と32のみの接触ではあったが下顎の欠損部にはインプラント治療を承諾してもらっていたので、上顎にはコーヌスデンチャーを作ることにした。コーヌスデンチャーは下顎のインプラントがオッセオインテグレーションする間に完成することを目標としたが、この過密な治療計画が装着後のトラブルの一因だったのかもしれない。コーヌスの支台は7632

図1



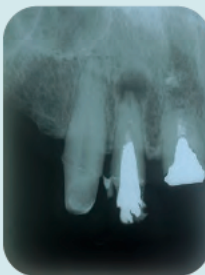
初診時の状態を示す。患者さんはしょっちゅう壊れる義歯に困っていた。そのため下顎の欠損部には強くインプラント治療を希望して来院した。

図2



約2ヶ月半で上顎にはコーヌスデンチャーが装着された。写真は装着後1週間の状態である。ネガティブ・ヴェンケルのある32のマージンにはメタルが認められる。

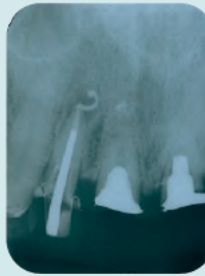
図3



コーヌス支台となった32の初診時のX線である。2には根尖病巣がある。

2003年5月7日

図4



オビアンガッタにて垂直加圧法にて根充を行い、コアを装着した状態である。根充材のオーバーフローは根尖部での加圧の低下を示していたが、ガッタパーチャを良くコンデンスすることで対応したつもりであった。

2003年5月23日

で片側のみであり、残存する111にはクラックがあったので抜歯前提でマグネットを入れ、使えるだけ使うこととした。

上顎のコーヌスデンチャーは初診より約2ヶ月半後(図1、2)、そして下顎のインプラント上部構造は約3ヶ月で装着し、遠方から来る患者さんへの対応がうまく行ったと安堵した。ところがコーヌスデンチャー装着より約2ヶ月後患者さんより歯がぐらぐらするというので連絡があった。私の脳裏にはコーヌス支台の動揺=歯根破折という構図が即座に描かれた。コーヌスデンチャーは内冠の修理に絡むことにはすこぶる弱いため気持ちが沈んだ。さて患者さんが来院し2を触診するとかなりの動揺があり、「やはり」という気持ちとなった。しかしその後X線撮影を行うと根側面ではなく根尖部に透過像を認め「治せる」という気持ちになった。つまり根尖病変の再発であり、根充にはシーラーも使っていないし特に根充材が不足している訳ではないので、レーザー照射で治るだろうとX線診査のみで確信できたからである(図3~6)。

レーザー照射後は炎症も収まり術後約8年が経過して

いるが全く問題は起こっていない。これがこの症例に対するレーザーによる一つの寄与である。前述した通りすれ違い咬合をコーヌス対インプラントで対処したため数年後にコーヌスサイドに問題が起きてしまった。つまり咀嚼効率が上がってきたことよりコーヌスの内外冠の適合状態が向上しすぎて、義歯が外れなくなってしまったのである。来院時リムーバーを使えば外せるが患者自身では爪がいたくて外せない状態となってしまった。そこで外冠のすり減った状態を観察し6の外冠内面に白金箔を2枚重ねてNd:YAGレーザーにてレーザー溶接した。これにより適度な離脱力となり患者さん自身で脱着可能となった。溶接してから約6年が経過するが箔は一度も外れたことがない(図7、8)。これが二つ目の寄与である。

この症例では2度もレーザーに助けられた。コーヌスデンチャーでは内冠を後から作ることは不可能に近く装着初期のトラブルは絶対さげたいし、遠方から来院する患者さんという要素は何かと精神的負荷を医師にかけるものであり、より失敗をさげたい要素ともなる(図9、10)。



図5 コーヌスデンチャー装着より約3ヶ月後、患者さんより歯の動揺と疼痛があること、連絡がはいり、その来院時にX線を撮影した。てっきり歯根破折と思って撮影したが、結果は根尖病変の再発と思われた。患者さんには根尖部のレーザー照射で治ることを説明し、延べ2日のレーザー照射を麻酔下根尖相当部のファーバー穿刺にておこなった。その後疼痛および動揺の再発は現在に至るまでない。
2003年10月24日

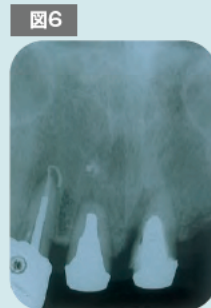


図6 レーザー照射より約7年後であるが、根尖付近の透過像も消失している。
2010年6月1日



図7 コーヌスデンチャー装着より約2年経過した頃より患者さんから義歯が外れないと言われるようになった。76に対しては下顎にインプラントを埋入し補綴処置したため、外冠の沈下に拍車のかかったものと推察した。そこで外冠内面咬合面側にポーセレンジャケットクラウンに使用する白金箔をレーザーにて溶接した。これにより患者さんは容易に義歯の取り外しができるようになった。



図8 図7の処置から約2年経過した拡大写真であるが、溶接の劣化は認められないようである。



図9 約7年が経過した状態であるがネガティブ・ヴェンケル部のメタル(32)も歯肉のクリーピングにより遮蔽され審美的にも改善されてきたことが観察される。



図10

レーザー療法での症例と実践応用講座 2

症例2 小さな血管腫(静脈湖)への照射
(図11~15)

規模の小さなおよそ大豆大くらいの血管腫をNd:YAGレーザーにて消失させた症例を報告する。血管腫は血管組織よりなる良性腫瘍で舌、口唇、頬粘膜、歯肉などに好発する鮮紅色ないし青紫色の母斑状、腫瘤状の病変で真の腫瘍はまれであるそうである。従って必ずしも除去する必要はないが問診により希望があれば除去するという程度の対応でいいと思う。一般的にメスで切除を行うと血管腫は出血のため完全除去が難しく瘢痕化の心配もまた必要となる。今回報告する患者さんは古くから来院していた患者さんで、たまたま問診したら実は気になっていたと言うことだったのでレーザーで除去した例である。右側上口唇口角部の頬粘膜寄りに存在していた大豆大腫瘤状の血管腫であった。まず靨頬移行部に浸潤麻酔を行ってから照射を行う。照射は腫瘍部に

直接レーザーのファイバーを風船に穴をあけるような要領で挿入し、中で方向を変えながら囊胞の壁に当てていくように行うが、連続照射による発熱は予後に瘢痕化を招来する可能性があるため間隔を置きながらゆっくりと照射する必要があるため筆者は1回の処置を3分ぐらいの目安で行っている(図11、12)。本症例では延べ2日2回の照射を2週間の間隔を開けて行った。また照射時は中から若干出血はするもののレーザーの石英ファイバーの太さの刺入であるため出血は非常にわずかである(図13、14)。筆者自身メスにて血管腫を除去したことはないが、メスでの除去であれば間違いなく専門の口腔外科医に依頼すると思う。また除去不完全な場合も多くあるらしいことを記載する文献もあるが、本症例では経過約8年が経過した現在でも再発の兆候は認められない。

今回は血管腫について報告したが口唇に好発する粘液囊胞にも著効である(図15)。易出血性の手術部位で穿刺により処置が行えることは非常に有用である。



図11 上口唇右側口角部付近の頬粘膜境界部付近に大豆大の血管腫(静脈湖)をみとめる。疼痛はないが腫瘍であるため違和感があった。



図12 靨頬移行部に浸潤麻酔を行い石英ファイバーにて穿刺を行っている。これに引き続き発熱に注意しながらレーザー照射を約3分間間欠的に行った。



図13 照射中も照射後も出血はわずかである。



図14 本症例は2週間隔で2度の照射を行ったが、写真は2度目の照射より1週後の状態である、わずかに照射痕は残っているが血管腫は完全に消退した。



(参考症例) 下口唇の粘液囊胞であるが血管腫と同じ対応で消失する。本症例は小豆大で1回の照射。8年後の現在も再発はない。

Profile

行田 克則 先生

- 1982年 日本大学歯学部卒業 ●1986年 日本大学歯学部大学院卒業 ●1988年 上北沢歯科開設 ●2007年 四谷三栄町歯科開設 ●日本顎咬合学会評議員 ●日本大学歯学部非常勤講師 <学会会員> ●日本顎咬合学会 ●日本補綴歯科学会 ●日本歯科審美学会 ●日本口腔インプラント学会 ●The American Academy of Implant Dentistry ●The Academy of osseointegration

医療法人社団 は・匠会

上北沢歯科 住所:東京都世田谷区上北沢3-17-6 七星ビル2階 TEL:03-3329-5068
四谷三栄町歯科 住所:東京都新宿区三栄町10番地 柳田ビル1階 TEL:03-3350-0817
HP:<http://www.hatakumikai.com/>

SASAKI

お問い合わせ・ご意見:『C&C』事務局 細谷俊寛

FAX 0120-566-052 <http://www.sasaki-kk.co.jp>

Vol.27 April 2012 発行:ササキ株式会社 東京都文京区本郷3-26-4 ササキビル4F

●本誌に記載された個人の氏名・住所・電話番号等の個人情報の悪用を禁じます。●本誌の記事・写真・図版等を無断で転載・複製することを禁じます。